Aristoteles *De Philosophia* Fr.13a Rossの問題
—アリストテレス『哲学について』再考

赤 井 清 晃

初期アリストテレスの失われた対話篇「哲学について」の断片として，Ross (Ross,p.81)によって採用されているFr.13aは，キケロの著作から採られたものであり，それは以下の部分である．

> Praeclare ergo Aristoteles si essent, inquit, qui sub terra semper habitavissent bonis et inlustribus domiciliis quae essent ornata signis atque picturis instructaque rebus iis omnibus quibus abundant ii qui beati putantur, nec tamen exissent unquam supra terram, accepissent autem fama et auditione esse quoddam numen et vim deorum, deinde aliquo tempore patefactis terrae faucibus ex illis abditis sedibus evadere in haec loca quae nos incolimus atque exire potuissent, cum repente terram et maria caelumque vidissent, nubium magnitudinem ventorumque vim cignovissent aspexissentque solem eiusque cum magnitudinem pulchritudinemque tum etiam efficientiam cognovissent quod is diem efficeret toto caelo luce diffusa, cum autem terras nox opacasset tum caelum totum cernerent astris distinctum et ornatum lunaeque luminum varietatem tum crescentis tum senescentis eorumque omnium ortus et occasus atque in omni aeternitate ratos immutabilesque cursus : quae cum viderent, profecto et esse deos et haec tanta opera deorum esse arbitrarentur. atque haec quidem ille.
> [Cicero *De Natura Deorum* II, 37.95-97.]

この断片は，初期アリストテレスの神学（神あるいは神的なものについて

の考察），天体論，あるいはコンテクスト次第では魂論という，Corpus（著作集）におけるアリストテレスの哲学との関連においてきわめて重要な問題に触れている．それ故，従来，この断片については，いくつかの疑問が提出されているが，Bosのまとめ方によれば，その主なものは，以下の通りである．

1. (a)この断片は，神々が存在することを証明しようとしているのか．それとも，(b)太陽や月，惑星などの天体が神々である，ということを証明しようとしているのか．

2. (a)この断片が示しているのは，神（神々，神性）が宇宙のシステムの一部として提示されるような「宇宙論的神学」であるのか．それとも，(b)天体を神（神々，神性）であると認識することは，形而上学的・超越的な神を洞察することへの前段階にすぎないのか（すなわち，この前段階的神学の先に，さらに，超越的な神を扱う形而上学的神学があるということなのか）．

3. (a)この断片とプラトンの『国家』第７巻のいわゆる「洞窟の比喩」との関係をめぐって，アリストテレスは，プラトンのイデア論に対して，天体の実在性を強調し，イデアに対してピュシス（自然）を立てているのか．それとも，(b)例えば，プラトンの『ティマイオス』の宇宙論に表明されているような宇宙の創生説に対して，天体および宇宙全体の永遠性を強調しているのか．

4. (a)この断片をいかなるコンテクストにおいて読むべきかという問題に関して，神（神々，神性）の活動が言及されているからという理由で，この断片を『哲学ついて』に帰するべきか．それとも，(b)「地下」を魂が肉体に縛られた状態の現世に，「地上」を魂が肉体が解放された状態に喩えたものと解することによって，『エウデモス』に帰することができ

るのか.

5. (a)この断片の段階で，すでに天体の領域は，月下の領域の四元素とは区別された神的な第五元素からなるという思想があるのか．それとも，(b)この断片では，まだ，アリストテレスは神的な第五元素という思想にはまだ至っておらず，例えばプラトンの『ティマイオス』に描かれるように，天体は火の塊であって，非質料的な魂によって動かされている，とみなしていたのか.

これらの疑問に対しては, Bosのみるところでは, W.Jaeger以来, 一般には, 1. a)，2. a)，3. a)，4. a)，5. a)が肯定されてきた（Berti, p.349 ; Jaeger, p.138 ; Untersteiner, p.175など）が，Bos自身は，これに対して，1. b)，2. b)，3. b)，4. b)，5. a)をとると言う(Bos, p.176)．我々は，これらの疑問に答えて，既存の解釈にまた新たな解釈を付け加えることを意図しない．これらの疑問に対する解答という点に関して，結論を言えば，a)，b)いずれの立場も，組み合わせによる整合性さえ確保すれば, どちらでも基本的に可能であろう. a), b)いずれの立場をとるかは，もっぱら，解釈者のアリストテレスの思想的発展史の理解にかかっている．従来の諸解釈は，例えば，Fr.26について既に示されたように（赤井，pp.39-45），解釈者のアリストテレスの思想的発展史の理解にあわせて，それを整合性をもつように，この断片を解釈してきたと言っても過言ではないであろう.

それでは，この断片――キケロによる，そらくは間接的なアリストテレスの『哲学について』の情報――を取り上げる意味はどこにあるのかといえば，初期アリストテレスの思想内容を確定することはできないにしても，初期および後期，すなわちCorpus(著作集)におけるアリストテレスの哲学の関係について，あり得たであろう可能性を想定することによって，Corpus(著作集)におけるアリストテレスの哲学の意味を，より深く理解することに資するという点，また，一旦，アリストテレス研究ということから離れて，キケロが

置かれていた思想状況の研究，すなわち，Barnesらが行なっているような，ローマ期の思想状況の研究という点で，意味をもち得るであろう．但し，本稿において我々は，第一の点を念頭においており，第二の点は，派生的な意味しかもたないことを断わっておかなければならない．

以上のことを，この断片に限らず，特に，キケロによる資料のもつ問題点として指摘しておいた上で，この断片の解釈の可能性をさぐってみたい．

すでに示した，Bosによる５点にわたる疑問は，断片中に直接言及がないという点で，5.のいわゆる第五元素，アイテールの問題は論外として，他の４点は，第一に，強く言えば，何らかの「神」的な存在の証明，弱く言えば，そのような「神」的な存在の示唆・ほのめかし，ということと，第二に，我々人間の視野の転換（あるいは拡大）ということを問題としていると思われる．第一の点について，さらに問題を具体化すれば，「神」は単数なのか複数（この場合は，天体のひとつひとつが「神」あるいは「神的存在」である）なのか，という問題，また，第二の点については，プラトンの『国家』第７巻の「洞窟の比喩」との関係と，そこで問題となるプシューケー（魂）が，我々個々人のレヴェルでのプシューケーであるのか，あるいはプラトンの『ティマイオス』におけるそれのような，いわば宇宙論的プシューケーであるのか，という問題につながってゆく．

第一の点は，Bosによる５点にわたる疑問のうちの1.と2.に直接かかわる．1.に関して言えば，Bos（およびそれに先立つ諸解釈者）の問題提起の仕方自体に問題があると言わざるを得ない．というのは，もともと３巻からなると想定されるアリストテレスの『哲学について』の第１巻は，a)「神々が存在すること」とかb)「太陽や月，惑星などの天体が神々であること」の証明を行なおうとしていたというよりも，単に，示唆するとかほのめかすことを意図していたという可能性があるからである．従って，必ずしも強い意味で「証明」ということは言えないのである．また，2.に関しても，やはり，問

題の立て方自体が，Jaeger流の，いわゆるアリストテレスの思想の発展史を前提としてのものであることは否定できないであろう．というのも，2.のa)にせよ，b) にせよ，アリストテレスが，その『形而上学』第12巻において示すような，「不動の動者」としての「神」，すなわち，2.のb) で言われるような，形而上学的・超越的「神」概念に至るまでの前段階として想定できる，それ以前の「神」概念を選択肢にかかげての議論になっているからである．この2.に限ってみても，a)，b)いずれもとり得るというのは，発展史的解釈をとるならば，容易にb)の立場をとることができるであろうし，発展史的解釈をとらない立場からしても，諸天体を(一種の神と言ってよい)「神的なもの」と解することによって，a) の立場をとることができるからである．我々としては，このどちらをとるか，という選択よりも，問題設定そのものへの疑義を提出することによって，この断片を扱うほうが，この断片が示している（あるいは示し得る）思想状況を見過たずに済むであろう．

また，第二の点，すなわち，「地下から地上へ」という人間の視野の転換という発想に目を向けるならば，ここには，少なくとも２つの問題が含まれていることが分かるであろう．その一つは，3.にかかわる問題で，プラトンの『国家』第７巻の「洞窟の比喩」との関係，特に，アリストテレスの論に対する立場がどのようなものであったかという問題である．この断片に示された「地下の人々の喩え」は，確かに，状況設定として，かなりプラトンの「洞窟の比喩」と類似してはいる．従って，もしこの断片の伝える「地下の人々の喩え」がアリストテレスのものであるとすれば，アリストテレスが，プラトンの「洞窟の比喩」を十分意識していたことは間違いない．状況設定は，確かに類似しているが，一方は，洞窟の外に，太陽に照らされたまばゆいばかりに明るい世界，つまりはイデアを指し示し，他方は，地上の壮大な自然の事物とそれを造ったと想像される「神的存在」を示唆する．この違いは，はじめから目指しているところが異なるようにも思われる．もう一つは，4.にかかわる問題で，「地下の人々の喩え」の延長線上には，必然的に，我々

人間のプシューケー（魂）の問題が浮かび上がってくるのであるから，この点を強調すれば，この断片は，「神」およびその存在に言及する『哲学について』の断片資料であるというよりも，プシューケーおよびその不死性に言及する『エウデモス』により関係がある，との解釈も可能であるということである．

このように，思想内容に関しては，様々な解釈が可能であるのだが，そもそも，キケロの伝える資料からは，何故，ある程度，決定的な，言い換えれば，一義的な解釈が可能な言及がないのかということは，あらためて，キケロの伝える資料の信憑性を問題にするに十分である．実際，この問題に立ち入ると，キケロの時代についての詳細な文献学的考証が必要となるのであるが，現段階では，我々は，以下の考察で満足しなければならない．

『哲学について』の断片資料として，キケロの著作を典拠として，Rossによって採用されているものは，5断片（6箇所）あり，断片資料全体の量が多くないことから，これらのキケロに基づく資料は少なからぬものと言わなければならない．しかも，その内容に関しては，Fr.26(Cicero *De Natura Deorum* I,13.33)の場合のように，情報量は多いが，またそれだけに他の資料との間に齟齬があり，内容的に一貫性を欠くといった問題がある（赤井，p.38）．それにもかかわらず，キケロによるアリストテレスの『哲学について』の言及が，信憑性の点で，一定の評価を得て，重んじられてきたのは，ギリシア語による資料は別として，ラテン語による資料としては，他に有力な資料がない，といった事情にもよるが，Fr.26の冒頭において，

> Aristotelesque in tertio de philosophia libro multa turbat a magistro suo Platone dissentiens.

とあるように，はっきりと，「アリストテレスは，『哲学について』の第3巻において云々」というように，キケロ自身によって，典拠が挙げられてい

ることが，これを読む人々に，あたかもキケロ自身が，アリストテレスの『哲学について』を――おそらくは，アテナイ滞在中に，ギリシア語で――読んでおり，アリストテレスのオリジナルを知っている，と想定させてきた．しかしながら，Barnesの指摘するように(Barnes, p.48)，Philodemusの*De pietate*に，やはり，

παρ' 'Αριστοτέλει δ' ἐν τῷ τρίτῳ περὶ φιλοσοφίας.....

という表現によって，アリストテレスの『哲学について』への同様の言及がなされていたと推定することができ，もし，キケロがアリストテレスの『哲学について』そのものではなくて，『哲学について』の内容を要約的に述べた――そして，そこには，当然，Philodemusの解釈や，さらにPhilodemus自身が典拠としたかもしれない第三者の解釈が入り込んでいる可能性もある――著作（ただし，これはギリシア語で書かれている）を読んで，そこにあるPhilodemusの「アリストテレスは，『哲学について』の第３巻において云々」という表現をそのまま借用しただとすれば，一見，アリストテレスの典拠まで示した，正確そうに見えるキケロによるアリストテレスへの言及も，実は，決して，アリストテレスの著作に直接基づいたものではなくて，却って，間接的引用・言及であって，キケロ自身の解釈ばかりか，キケロ以前に第三者の解釈が入り込んでいる可能性が大いにあるのであって，従って，我々は，この断片が伝える内容を，そのままアリストテレスの述べたものとして受け取ることはできないのである．

文献

赤井清晃，アリストテレス『哲学について』Fr.26における「神」の概念――キケロによる資料に基づいて――，' 京都大学西洋古代哲学史研究室編『古代哲学研究室紀要』VIII, 1998, pp.36–47.

J.Barnes, "Roman Aristotle : 16. Cicero", in J.Barnes and M.Griffin (ed.) : *Philosophia Togata II : Plato and Aristotle at Rome*, Oxford, 1997, pp.44-50.

E. Berti, *La filosofia del primo Aristotele*, Padova, 1962, p.349.

A.P.Bos, *Cosmic and Meta-Cosmic Theology in Aristotle's Lost Dialogues*, Leiden, 1989, pp.174-184.

W.Jaeger, *Aristoteles : Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*, Berlin, 1923 (English translation by R.Robinson, *Aristotle : Fundamentals do the history of his development*, Oxford, 1934, 2nd ed., 1948).

Ross, *Aristotelis Fragmenta Selecta*, Oxford, 1955.

M.Untersteiner, *Aristotele : Della Filosofia, Introduzione, testo, traduzione e commento esegetico*, Roma, 1963, pp.175-181.

付記：本稿は，研究課題「初期アリストテレスの思想研究」の一部をなすものであり，平成11年度科学研究費補助金（文部省）による研究成果の一部である．

Problema in fragmentiis *De Philosophia* Aristotelis
---Retractatio de fragmento n.13a Ross

Kiioakius AKAI

Hac retractatione designatur dubitatio de auctoritate fragmenti n.13a (Ross) quod attribuetur dialogo *De philosophia* quem Aristoteles Iunior scripsit. Videtur enim Ciceronis renuntiatio non pendere ex textu Aristotelis sed ex epitomiis aliorum. Nihilominus, praeter hanc dubitationem de auctoritate, possibilitas interpretationum de conceptu deitatis et animae invenitur in hoc fragmento, et hae interpretationes videntur esse utiles ad comprehensionem totius Corporis Aristotelis.